2003 早大学位記 3676 報告番号 甲 乙
3676-2

W 学位論文 3676 2

博士（人間科学）学位論文　概要書

母子間の抱きの人間科学的研究
：ダイナミックシステムズアプローチの適用

A Human-Scientific Study of Holding in Mother-Infant Relationship: An Application of the Dynamic Systems Approach

２００４年１月

早稲田大学大学院　人間科学研究科
日本学術振興会　特別研究員
西條　剛央
Saijo, Takeo

研究指導教員：　根ヶ山光一　教授

目的

本論文の目的は，構造構成主義を認識論的基盤としたダイナミックシステムズアプローチ（以下，DSA と略す）を方法論的基軸として，求心-遠心をはじめとした両極包括的視点を重層化させる人間科学的研究法によって，母子間の抱きを全体的に理解することであった。

1 章：人間科学的研究法の提案

1 章では次の 2 点が中心に論じられた。第 1 に，人間を全体的に理解するための人間科学的研究法を提案した。第 2 に，それを踏まえ，現在の発達研究の枠組みを再考し，『横断研究―DSA に基づく縦断研究』を効果的に組み合わせることにより人間科学的発達研究法として位置づけた。さらに，求心的側面に偏重してきた「抱き」をより包括的に捉えるために，母親が自分の子どもを次第に抱かなくなって行く発達的過程を「離抱（りほう）」と名付け検討することにより，『求心―遠心』の両側面からアプローチすることとした。これらの視点を掛け合わせることにより，母子間の「抱き」を多面的に理解するための以下の 4 つの研究が行われる必然性が示された。

2 章：抱きの人間科学的研究

2 章では，こうした観点から母子間の抱きの検討を重ねた人間科学的研究が行われた。

研究 1 では，生後 8 日から 2 年 1 カ月までの乳幼児とその母親 29 組を対象に抱きの横断的観察を行った。母親が座っている状態，立っている状態，歩いている状態における抱きの場面が撮影・分析された結果，以下の 2 点が示された。(1)子も抱きの成立・維持に手で支えるなどして積極的に貢献しており，その行動は子の姿勢発達に伴い増加する。(2)母親の抱き方は，抱く際の母親の姿勢状態や乳幼児の姿勢発達の段階によって異なる。以上のことから，母子が姿勢という身体要因を基盤として，互いに関与することで，抱きが成立・維持される相互的行為であることが示唆された。

研究 2 では，生後 1 カ月の乳児とその母親 16 組を対象として，1 カ月から 7 カ月時まで 1 カ月おきに抱きの縦断的観察が行われた。そして，DSA に基づいた検討の結果，縦抱きの移行プロセスは，以下の 2 パターンがあることが明

らかとなった。(1)乳児が抵抗を示しはじめると，母親は間主観的な解釈を媒介として，乳児が安定する抱き方を探索し，その結果「抵抗」の収まる縦抱きに収斂する。(2) 身体情報としての乳児の首すわりが母親に縦抱きをアフォードする。

研究３では，母親が自分の子どもを次第に抱かなくなって行く離抱現象の概観を明らかにすることを目的とした。1-13 ヵ月の乳幼児を持つ母親 298 名を対象とした質問紙調査を行ない，抱き時間や乳幼児の発達に関する情報を集めた。その結果，未首すわり段階に 6 時間以上あった抱き時間は，歩行段階には 2.5 時間へと減少していくことが明らかとなった。さらに，乳児の発達的側面から，離抱に影響を与える要因を検討した。その結果，(1)姿勢運動発達，(2)身長，(3)体重，(4)授乳形態，(5)子の体を動かす行動，(6)子の抱っこから降りたがる行動が影響を与えていることが示された。

研究４では，生後 1 カ月～３カ月の子どもを持つ母親 21 組を対象として，最長４０カ月まで１カ月おきに離抱の縦断的調査が行われた。DSA に基づき，個々の母子における離抱過程が記述されるとともに，授乳抱き，通常抱き，おんぶ抱きの 3 側面に焦点化され，離抱に影響するコントロールパラメータが検討された。その結果，平均値からは，全抱き時間は初期に山型を描くものの全般的には乳児の月齢と共に右肩下がりに減っていくことが示された。また個々の発達軌跡に基づいて検討した結果，離抱過程は多様であり，かつ非線形の様相を呈し減少することが示された。乳児の発達的側面から離抱に影響を与える要因を検討した結果，主に(1)姿勢運動発達，(2)体重が影響を与えていることが示された。

３章：総合議論

２章の概説後，母子間の抱きを説明する「説明モデル」が提起され，母子の身体を基盤としたやりとりの結果，子の発達にともない抱きは成立，変化し，また同時に離抱が促進されることが示された。これは抱きが自己組織化するということであり，そのことから，抱きは母や子のいずれかの行動に還元することができないこと，事前にプランニングされるのではなく，「抱き」は子を含めた環境の中で「探される」ことが示唆された。さらに，従来の行動研究における記述と認識の問題点について論じ，行為者が何をしているかを理解するためには，完了形ではなく，進行形として行為が現象している行為主体に視点を

移して，解釈を再構成する必要があることが論じられた。その結果，『探している最中は，何を探しているのかもわかってはいない』という行為者側の視点が浮き彫りになり，『抱きとは母子の身の重なりあいにおけるうごめき』であるという視点が提起された。そしてこの視点は，抱きや調整的母子観といった先行研究の前提，問い方を大きく変更し，より妥当な現象理解に近付けうることが示された。

以上から，１章で提唱された人間科学的研究法の実行可能性と有効性が具体的研究例を通じて実証されたことから，最後にそれを改めて人間科学的発達研究法のモデルとして提示した。